第７１号　２０２３年４月１５日

特定非営利活動法人

アーシャ

ASHA　アジアの農民と歩む会

会報
７１号

有機質液肥の効用と使い方を説明する農場主任サントシュ・クマール（手前右端）

AOAC稲作セミナー

2023年3月15日、20名のアラハバード有機農業組合（AOAC)の栽培農家と職員が会し、合鴨稲作同時作の勉強会をしました。それぞれが持ち寄った稲を比べ、施肥と生育状況、田の鴨の有無による比較、葉色節間の長さ等を調べました。結果的には合鴨農法で長くなっていた農民の方が化学肥料中心の稲より生育が良好であることが判明。土と鴨が健康であれば稲も人間も健康であるのです。

優良な稲を育てる有機質肥料の施肥方法を披露する栽培農家アンシュマン・ビンド（左）

アンシュマン・ビンドの合鴨水稲同時作を見学

マキノスクールの簡易ハウスによる雨除けトマト栽培

巻頭言　　アーシャの目指すもの

コロナからの脱却
困難から自立と人材育成を目指す

プロジェクト統括責任者・三浦　照男

マキノスクールの事業の影響：新型コロナ禍のインドの約3年間、思い起こせば悪夢のような日々でした。当初、他国に比べても厳しい行動規制が布かれたにも拘わらず、感染者数及び死者数はうなぎのぼり、不安と恐怖が国中を襲いました。インドのメディアは火葬できない夥しい数の遺体が川辺に埋められた様子や、重症者の治療設備不足のため車の中で苦しそうに酸素投与を受けている感染者の様子等をメディアで流していました。正に、中世欧米を震撼させたペスト（黒死病）の再来かのようでした。

実際の感染者数や死者数は毎日数十万人と発表されていましたが、実際にはもっとではないかという噂が飛び交っていました。通常は人、車、リキシャ、牛や水牛等で喧騒としている街がシャッターを下ろしたままの閑散とした状況は不気味でした。「何時コロナ禍は収まるのだろうか」と思ったのは私だけではないようです。情報が錯綜する中で、「政府の推し進めるコロナワクチンを打つと死んでしまう」と接種を拒む仲間がほとんどでした。情報が少ない農村ではその不安は想像を越していたと思います。

このコロナ禍でマキノスクールは毎年実施していた持続可能な農業農村開発コース（9ヵ月間）の中止を余儀なくされました。また、本会の農村開発の中核的事業であったアラハバード有機農業組合（以下AOAC）の売り上げは7割近く減少してしまいました。主力商品の日本米、味噌、醤油の消費が極端に減ってしまったのです。ですから給与は上げるどころか臨時雇いの人々を整理せざるを得なくなりました。追い打ちをかけるように、コロナ感染が始まる直前の2019年11月、大学の海外支援金受け取り銀行口座が中央政府の指示により突然キャンセルされてしまいました。この影響もあって4年間の予定であったプロジェクトが 、1年2ヶ月で中止となりました。

より自立した事業の確立：この窮地を乗り越えるために、マキノスクールの活動を極力自立できるように意識改革することにしました。特に、AOAC組合運営や、普及活動はスタッフの給与を含め収支がマイナスにならないようにすること、そして外部からの資金注入がいつでもあるわけではないことをスタッフに理解してもらい、その実践に向けて様々な行動の中で工夫しています。

そのためにも、組合スタッフは普及活動をしっかりし、栽培農家が健康で品質のよい食べものをつくり、彼ら彼女らから買い上げた農産物をしっかり管理すること、消費に応じた栽培計画を農家と一緒により緻密に行うこと、更にAOACの特異性は何かを理解した上で、販売戦略や市場開拓が必要だということをスタッフと組合栽培農家が一丸となり目標に向かうことが必要との認識を一人一人が持つことです。

自立の難しさから学び合う：当初、組合の目的は「小規模農家のための活動」ということでした。ですから、極力、スタッフも活動地域の農村から雇用するという方針をとりました。しかしながら、北インドの農村において農村出身のスタッフのみで自立した経営運営を任せるのは非常に難しいことがわかってきました。その理由は、農村での教育が劣悪な状況にあったことで、高校、大学卒業証書を持っていても、簡単な計算さえできないものが多いのです。また、伝統的なカースト制度の行動規範が未だに残っており、新たな挑戦や自分のカースト以外の仕事（例えば販売や営業等）をすることへの抵抗があるのです。農村といういわば家族単位の自営農で何世代に渡って生活してきた人たちの生活スタイルを組織的行動規範に変えることにかなりの時間がかかりそうです。

しかし、これらの壁を一つ一つ乗り越えることでしか組合やその他の事業を自立へと導くことはできないと私は考えています。それを乗り越えることによって現在働いているスタッフの子どもたちへと希望が続くのです。彼ら彼女らの背中を見て農村の子どもたち青年たちが変わっていくことに希望を抱きたいのです。農村の青年の育成は変わりゆく社会情勢の中で重要性が益々増えてきました。3年間、休止していた持続可能な農業農村コースを今年6月下旬に再開することにしたのもこの理由によるものです。人材育成を実施する者、受ける者、支援する者が協働で学び合い、高め合ってこそ人材育成事業が成し遂げられると考えています。

稲作セミナーで栽培農家に話をする筆者

外国に出て、今までいた自分の世界を知る

岡　言紀　（SCSAD2016年卒）
愛農学園農業高等学校職員

筆者・愛農高校の牛舎にて

アーシャ会員の皆様。こんにちは。岡言紀と申します。
自分の母校でもある三重県の伊賀にある愛農学園という農業高校にて牛のお世話をしています。10年ほど前に愛農学園を卒業して、高校の当時の校長先生のご紹介を受け、インド・アラハバードにあるマキノスクールで日本人学生として一年間暮らしました。今回アーシャからからご依頼を受けアーシャ会報の「卒業生は今」という題名で、文才は微塵のかけらもないのですが書かせていただきました。

さて、“卒業生は今”ということですが、冒頭にも書かせていただいた通り、現在、母校である農業高校の酪農部門の担当として日々牛と戯れております。愛農高校はキリスト教・聖書を土台とした私立の全寮制で有機農業を教える農業高校です。農業に興味のあった十代の自分は愛農学園に入学して、そこでちょっと特殊な青春を大満喫。卒業後愛農学園の4年目のカリキュラムである専攻科に進み農家に一年間住み込み研修をして、農業漬けの高校生活をしてきました。そんな日本の一風変わった高校で過ごし、狭い世界で暮らしていた自分がインドという混沌とした世界に飛び込んで過ごした一年というものはそれはもう言葉で容易に言い表せない刺激の多い一年でした。

今から7～8年前の出来事ですが、ついこの間のことのようです。インドの人や食べ物、空気やにおい、五感すべてに刺激を与えられる毎日でした。今までいた世界から大きく一歩外に出て見えてきたものは、意外にも日本のことでした。自分が暮らしていた日本の環境のことだったと思います。インドに行き、違う文化や言葉、習慣にふれ、もちろんインドのこともたくさん知ることができましたが、今まで生きてきて見てきたものは、球体に近い多面的な側面のほんの一部分だったのだと感じさせられました。外に出て今までいた自分の世界を知る。これはインドに行ったから得た貴重で大きな学びでした。

2015年10月の研修旅行。ヒマラヤ山岳地帯の有機農業運動について。ホームステイ先の農家一家とクラスメートと共に（中央後ろ側・筆者）

そんなこんなで日本に戻ってきた若干二十歳の僕はどこかに落ち着くことはなく各地を転々としていました。そうです。インドで暮らしていたおかげで日々に刺激を求める体になってしまったのです。自転車で各地を回ったり、ニュージーランドに1年間ワーホリに行ったりもしました。プカプカと流れに身を任せ漂っていた僕は愛農高校の教頭先生にさっと釣りあげられ、愛農高校にスタッフとして戻ることになりました。

愛農に戻って2023年度で4年目になります。ここにはたくさんの刺激があり毎日が学びや経験の日々。高校生からしたらしっかり、すっかりおっさんですがまだまだ知らないこと学ぶことがたくさんあるなぁと感じながら過ごしております。知らないことを知る。見たことのない世界を見る。このことは僕にとってとても大きな喜びになっていました。勉強や新しいことに挑戦することが決して好きではなかった僕をこうさせたのはきっとインドでの濃くてスパイシーな日々のせいなんじゃないかなぁと今になって感じます。いつかまたインドに行きたいなぁと牛のフンを掃除しながら思うマキノスクール卒業生でした。

　それでは、お会いする機会があればその日まで。ぜひ愛農高校にも足を運んでいただけたら幸いです。
ではでは。なますて。

2015年10月下旬の稲刈りの後で。筆者（右から4番目）

アジア生協協力基金支援 縫製事業の3年間のあゆみ

AVSS代表＆AOAC事務局長　川口 景子

2019年度からアジア生協基金より3年間の事業（1年延長で実質4年間）のご支援をいただき、今年の2月末に事業が完了しました。この事業は、「北インド農村女性の自立支援のための手工芸品マーケティングシステムの確立と生産・技術能力向上」を目的にしてきました。それ以前から農村での縫製教室やバッグの開発など、少しずつ活動を広げてきた農村女性の縫製グループAVSでしたが、この事業を通して、その技術力や販売力、管理能力を向上し、日本とインドで販売店などの顧客とつながり、両国で必要とされる商品を開発し販売できるようになること。その上で、活動の持続可能な運営と現地の農村女性の成長や活躍の機会を提供する体制を構築することを目指してきました。

1年目は青年海外協力隊出身の中村真奈さんという、デザイン・縫製の専門家との出会いに恵まれ、縫製の基礎の確認から始まりました。また、これまでの縫製品を見直し、商品としての機能やデザインの向上に取り組んだり、「インド土産」として日本でも通用する質や注目を集めるデザインを目指して、16品目57種類　もの作品が中村さんのリードで開発されました。

開発された商品は、プロフェッショナル研修コースで、まずは中村さんから先輩メンバーに指導してもらい、その後、先輩が後輩に教えるという体制をとりました。そうすることで、教える前に先輩メンバーは、何が分からないのか考え、繰り返し練習することによって、更に縫製方法についての理解を深めることができました。また工業用オーバーロックミシンを助成金で購入することができ、今までよりもずっとスムーズにきれいに布端の処理ができるようになりました。

専門家の中村さん（左から2番目）とプロフェッショナル研修コースの参加者の農村女性たち

オーバーロックミシンの糸のかけ方を練習する参加者

インドの首都デリーでのお店３軒でもお土産として扱っていただけることになり、「これからデザインや縫製員をどんどん増やして販売していこう！」というところで、2020年3月に新型コロナ感染拡大防止のための全土封鎖がインドで始まりました。プロジェクト2年目の幕開けは、全く先が読めない中で始まり、また、多くの外国人が帰国し、旅行者も途絶えてしまったことから、「お土産」が市場で全く動かなくなってしまいました。インドと日本の国際郵便も数か月止まってしまいました。

そんな中でも、みんなでできることを見つけてやっていこ

開発された商品の例

左：パイピングペンケース
上中：コインケース
上右：ラウンドパース（巾着）
下：刺繍ヘアゴム

農村女性の育成と自立

うと事業を続ける決意をしました。コロナ禍ではマスクが必要なのに、市場えはマスクが不足していました。日本から中村さんに立体マスクの作り方をオンラインで指導していただき、ブロックプリントのマスクを大学近辺の店に置いてもらい、病院などにも営業に行きました。マスクは学校が再開するタイミングで、子どもたちに必要となり、農村では、マスクを購入するお金に困っている家庭も多かっ

農村で布マスクの作り方を教えるAVSメンバー
マキノスクール・マイダ村農村改善センターにて

たため、本会で募金を募り、縫製員が他の農村女性にマスクの作り方を指導し、農村の子どもと女性を中心に1000枚以上を製作、配布しました。

また、近くの病院から防護服や医療用エプロンの製作の相談があったり、飲食店への規制が緩くなった後に、近隣のカフェからオリジナルプリントのエプロンの注文があったりと、現地でも縫製技術で役に立てることがたくさんあることにも気づく豊かな機会となりました。

イベントでの出店、展示販売も、日本・インド双方で地道に消費者と関係づくりをする大事な機会でした。

3年目の最終年度は、コロナ禍により四苦八苦してきた活動の集大成の年でした。今までの経験から、今後どのような商品に注力して製作、販売するか整理し、方向性を打ち出す必要がありました。手工芸品は買い手が限られる傾向にありますが、衣服なら毎日着るものですので、スカートやエプロンから始まった衣服を様々な日本のお店に見てもらい、改善を重ねました。また栃木県のフィンランドの森（株）早稲田YINヨガアカデミーとのヨガパンツの共同開発に取り組みました。

また、オリジナルプリントのトートバッグや無地バッグも、岐阜県の山のハム工房ゴーバルや、東京・下北沢のセレクトショップ三叉灯、インドの学生グループ、大学同窓会などと共同開発、大量受注、製作販売することがスムーズにできるようになりました。

元小学校校舎を利用したヒカリノカフェ蜂巣小珈琲店
（栃木県大田原市）ギャラリーでの出店の様子

計4年間の事業での積み重ねを得て、AVSメンバーも本会スタッフも成長することができたと感じます。特に、数年前までは農村から外に出たことがなかった女性たちが、工房まで毎日通勤し、街まで行ってイベントに出店し、役割をもって作業にあたったり、後輩に教えたりして、日本でもデリーでも褒められるレベルの商品を作製できるようになったこと。組織として「手工芸品マーケティングシステムの確立と生産・技術能力向上」を構築できたことは喜ばしいことです。そして、パートナーである買い手とつながり、活動の意義をご理解いただきながら、作り手を育てるように見守っていただき、縫製員は喜ばれる商品を作製しようと尽力する、そのつながりの輪が、あたたかい社会を作っていくのだと感じています。皆様のご協力、ご支援、ご声援に感謝申し上げます。

左上：ヨガパンツ
右上：チュニック
中央：スカート

クラウドファンドを通して

ミャンマー・北東インドの学生に奨学金を

インド事務局・大木 恵利

2020年3月、新型コロナウィルスが世界各国やインド国内で感染拡大したことによって一時停止を余儀なくされた『持続可能な農業・農村開発コース(SCSAD)』が、今年7月より再開されます。今年度に入り、2021年に勃発したクーデター後、未だ社会情勢が不安定なミャンマーのSCSAD研修生送り出し団体よりコース再開の依頼があったことが再開のきっかけになりました。次ページを参照していただくと分かりますように、今回は、特にミャンマーや北東インド出身の若者達への奨学金支援のため、マキノスクールと共同でクラウドファンディングを実施しています。

クラウドファンディングとは、「群衆（クラウド）」と「資金調達（ファンディング）」を組み合わせた造語で、「インターネットを介して不特定多数の人々から資金を調達する」ことを指しています(CAMPFIRE HPより)。「こんなモノがあったらいい」「こんな施設を作りたい」「お店を開きたい」といった想いを抱く起案者がプロジェクトを発信し、その想いに賛同する一般人が資金提供し、起案者はプロジェクト達成後に関連サービスや商品を支援者へリターンとして送付する仕組みです。2000年にアメリカから始まり、日本では2011年に導入されました。アーシャは、プロジェクト運営の為の新しい資金調達の形を模索する意義も含めて、クラウドファンディングに挑戦することにしました。

アーシャの活動は皆様からの一般寄付、会費、助成金、前年度からの収益などで賄っています。現在、少子高齢化社会の最中にある日本では、国外の問題へ目を向ける余裕がない雰囲気が漂っています。多くの国際支援団体が資金調達について頭を抱えていると思います。国際支援について考えてみると、戦後から現代までその在り方や方法は目まぐるしく変化しています。JICAのデータによると、日本のODA支援額は、戦後1970年～80年代に増加し、1990年を除いて2000年までの10年間は世界一でしたが、その後減少し、現在世界では5位の援助国となっています。また、日本国際問題研究所は2012年の日本のODA支援額の国民総所得（DGI）比は0.2%で、主要援助国22か国中20位というデータもあります。その経済規模と比べると日本のODA支援額は非常に少ないかもしれませんが、世論調査では、日本の経済状況が良くない状態の中、国際援助額は少なくするべきという声があります。

一方、日本政府によるODA支援額が減少状態にあった1990年代、全世界で国際的に活動するNGOの数は急増し、国連の経済社会理事会によると、同会と協議資格があるNGOは2016年でおよそ4,665団体としています。一般的に、国際協力NGOは現地に密着して調査・情報収集を行い、プロジェクトを計画・遂行することから、被支援国の地域社会や住民と草の根レベルで活動している点で国際社会において極めて重要な役割を果たしていると言えます。

では、国や国際社会、NGO/NPOそして個人すべてひっくるめて、私たちはなぜ国際支援をするのでしょうか。イギリスの国際開発学者のデイビット・ヒュームは、人が国際協力に携わる理由について以下の4つをあげています。1、困っている人を助けるのは人の道だという「道徳的義務」。2、開発途上国の問題は先進国による植民地支配などの帰結。故にその罪を償う「道義的責任」。3、国際支援は巡り巡って支援者の利益になるという「共通利益」。4、物資を給与する形で行われる政府開発支援は、支援国企業や国民に直接的利益を与えるという「自己利益」。

グローバル化や情報化が進んだ現代、様々な価値観が存在します。国際支援の方法も理由も一つに絞る必要はないと痛感します。戦後の復興のため、世界銀行からは有償の低金利援助（1990年に世界銀行への低金利の返済を終了）、その他団体からは無償援助を受けた日本も、多くのアジア諸国へ戦後賠償としての意味合いで技術協力、研修生受け入れ、専門家派遣を展開してきました。支援後、日本も先進国へと成長し、他のアジア諸国も被支援国から支援国へと変わりました。クラウドファンディングを通して、広く一般の方々にアーシャの活動やインドやミャンマーの現状を広めることができ、今後のアーシャ、SCSAD研修生、クラウドファンディングの支援者の方々の可能性が拡がっていくことに繋がれば、これほど素晴らしいことはないと信じています。皆さま、支援・応援のほどよろしくお願いいたします。

農村リーダーの育成

QRコード、又は以下のURLからアクセスして
ご支援ください

https://camp-fire.jp/projects/view/650052?

研修内容は？

授業や農業・加工実習の他に、様々なイベントの企画や参加によるリーダーシップ、研修旅行、村落調査等も含まれます。

インターンスタッフ、ボランティア募集中！！

異文化の中で、仲間と一緒に仕事をしてみませんか！

持っている経験や知識を活かし、北インドの人々との協働はあなたたちの新たな発見や学びになります。年齢は問いません。仕事は、農業一般、食品加工、器材修理、農産品及び縫製製品の販売促進、事務、コンピューターや英語の教師等。基本的に1年。随時受付
食費・宿泊費は支給されますが、渡航費・海外保険は自費です。
詳しくは　recruitment@ashaasia.org（担当　三浦）まで。

『持続可能な農業・農村開発コース』日本人学生も募集中！！

アーシャ活動地アラハバード農村での村人への聞き取り調査の様子。

コロナ禍後初、2023年度から「持続可能な農業・農村開発コース（SCSAD）」の研修を実施すべく、インドだけにとどまらず、日本やミャンマー、ネパールからも学生を募集しています。
研修期間：2023年6月21日～2024年3月23日（英語集中研修含む）
費用：70万円（航空券、ビザ申請料、海外保険（必須）、予防接種（任意）、小遣いなどは除く）
条件：国際協力や農村開発に関心がある高卒以上の男女（18～45歳）。
応募締切：４月30日
お問い合わせは、recruitment@ashaasia.org（三浦、大木）まで

アーシャ事務局便り

❄ **2023年度の会員のご継続と会費納入をお願い申し上げます。ご支援ください。**

アーシャ会員・理事懇談会

12月17日(土)、会員･理事懇談会を開催しました。北海道､福島､栃木､東京､三重､福岡､インドをオンラインで結び、18名が参加されました。三浦照男副代表理事より現地事業の概況が報告されました。縫製事業はアジア生協の助成金の最終年度となり、マーケティングシステム確立、技術力向上に努め、自立的な運営を模索しています。アラハバード有機農業組合も自立するよう助言活動を強化しています。また、新たにJICA草の根協力事業で大豆関連事業をウッタラカンド州において開始する準備を進めています。続いて、三浦孝子代表理事より国内収入向上事業の概況が報告されました。取扱店加増、出店販売促進、ネットショップ「ASHA STORE」の商品強化を図り、顧客の声をハンディクラフトの商品開発・改良に反映しています。モリンガは10グラム入り商品を開発してお試し摂取を推奨し、モリンガの認知度向上に努めています。最後に、今後のアーシャの活動等について意見交換を行い、皆様より様々なご意見をお聞きすることができました。

会員様、お客様からのお声

懇談会に参加された会員の溝口さん（写真後列左から3人目）は、展示販売会場にモリンガシフォンケーキを差し入れてくださいました。とても美しく、おいしかったです。特選モリンガパウダーを愛用されているご経験から、入眠時にモリンガ茶を飲むと気持ちよく眠れる。

花粉症の季節、モリンガ茶で癒される、とお話しを聞かせていただきました。ネットでも、花粉症とモリンガの記事がアップされていました。個人差はあると思いますが「モリンガ葉のスギ花粉アレルゲン誘発好酸球集積に対する抑制作用」という文献もありました。気になる方、ぜひネットサーフィンしてみてください。展示販売ではモリンガ入りチャイ、モリンガ入りほうじ茶の試飲が好評です。身体に良いなら飲んでみたい、苦いのかなと思ったらおいしいんですね、などの感想が多く聞かれました。

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。 2022.11.16～2023.3.20 順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【山形県】志藤正一【栃木県】菊地創，後藤正昭，田村修也，西田京子
	【茨城県】岡村絵梨奈【東京都】中内照夫【埼玉県】二宮牧雄
	【愛知県】伊藤幸慶，町上貴也【兵庫県】本田楽【熊本県】髙丸和彦
賛助会員	【山形県】長南正明【栃木県】池田桂子【東京都】上遠恵子【神奈川県】大木光一
団体賛助会員	【栃木県】那須塩原教会
一般寄付	【山形県】佐藤昌司，志藤正一【栃木県】宇都宮松原教会
	【埼玉県】奥起久子，二宮牧雄【静岡県】古橋克己
指定寄付	【北海道】奥村昌子【山形県】荘内教会保育園【群馬県】島村めぐみ保育園
	【栃木県】今野善郎，川上聖子，西那須野教会【島根県】吉﨑彰一

■**会費**　個人正会員　5,000円　団体正会員　20,000円　終身個人正会員　50,000円　終身団体正会員　100,000円
個人賛助会員 3,000円　団体賛助会員 10,000円　終身個人賛助会員 30,000円　終身団体賛助会員　50,000円

■**郵便振替**　加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会　口座番号：００１６０－０－３１５１４７

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会 ☆この会報は日本で製作･印刷しています☆
＜事務局・交流センター＞〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17　TEL：0287-47-7840　FAX：0287-47-7841
事務局　朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org　ホームページ: http://www.ashaasia.org